季節を詠む、時流を詠む 四季の歌

美野里短歌クラブ

行方の直売所まで春メロン買いに行きたり微風にのり　菱沼清子
見たかった淡墨桜すでに散り葉桜となり青空むなし　菱沼友江
老い猫の呼吸突然乱れおり一抹の不安頭をよぎる　宇都宮和子
娘より送られてきた鉢植えのカーネーションは優しく薫る　碇谷きえ
みどりの日その名のとおり快晴で夏日の風が頬をなでゆく　白根沢清香

小川短歌会

家族らと朝々交わす「お早う」と共に明るい今日のはじまり　石田はる江
年取るとアクシデントは突然に畳の縁ですってんころり　小川ヒロコ
鳥よけの赤きネットの風にゆれ日ごと西瓜の育ちゆきたり　中根良子
あじさいの花をぬらして降る雨に梅雨入りしたとしみじみ思う　根本智恵子
自らの重みに落ちて誇りかにかたちを保つ椿のまっ赤　幡谷啓子

玉里短歌会

曼荼羅に紫陽花百種咲く寺の今年の人気はレッドバロンと　松田通喜
同窓会終わりて外に出る夕べ別れがたくてはしご酒する　鶴町文男
天を突く鹿島の杜の杉大樹太きワイヤーに幹支えらる　野口初江
一連のしぐさがつくる射手姿日本武道の美の粋を見す　石橋吉生
見上げれば木を抱き込んで藤の花咲く山の道ゆっくり辿る　高田久子

みづうみ俳句会

朝床に青葉風音輝やかす　榎本喜代子
これほどに強く生きよと竹根掘る　長島さか江
余生とは思えど多忙冷奴　長島久美子
シャツボタン一つはずして夏に入る　長島昭
水芭蕉水面をゆする風やさし　三村れい子

みのり俳句会

花菖蒲一輪活けて居間明り　立原千代
眩しけれ若葉も流るる浮雲も　友水清
麦秋やさもなき雨の里静か　塚田文江
虫を追ふ虎視眈々と蜥蜴の子　佐藤清子
鶯の省略された鳴き声も　島田草心

欅の会

算盤の五つ玉祖母の単衣帯　岡島禮子
蛍の水面を点す隠れ宿　矢口冨久
古びたる真帆にも夏の風のいろ　網代奈津江
夏盛ん大黒柱の欅かな　石田敏江
山百合を通り過ぎたる美少年　木村小夜子

くるみ俳句会

千切れ雲ゆっくり流れ梅雨晴間　島田篁村
夕涼み遠い昔の父の顔　城垣内睦子
園バスの車体貫く夏至の風　福島邦誉
捩花の天を突き刺す心意気　堀内いづみ
文添えて友の絵手紙百合の花　松崎淑子

たまり俳句会

初夏の朝九九諳んずる登校子　小玉知子
もの思い霞浦の大橋夏灯　矢口友子
奥宮の静寂破りて時鳥　大石康子
吾も風も芽の輪くぐりて神の国　れも
鰻食ぶ口々に老い語りつつ　関千恵子

小美玉川柳会

帰りにはみんなが知人バス旅行　大盛食堂
AIに川柳まかせ昼寝する　信田正男
はなやかにアジサイの色移り色　梶山平
老いてなお初体験の多いこと　谷よし江
酒代とパチンコ代は薬代　下重悟史